

三十六年

一月一日

二富める賄委員の日はく、本日ノ昼食は午後三時たるべしと、蓋し此夜宮部舎長の舎生一同に賜ふに、彼の宅にて晚餐の栄を以てするの約ありければなり。

午後六時と来らんとしぬ、札幌の正月には妙らしき雨を冒して舎長の宅に向ふ、総勢十七名。囲碁、行軍将ギ、カルタ、トランプ好める処に従つて興を湧かしぬ、食ふに尽きざる密柑と煎餅とあり、而して遂にスシあり、快

[ 入力者注：「煎」は「前」の下「れっ

か(四点)の代わりに「火」]ならざるを得んや、興湧かずとせんや、終りにコーリングプロバークといふ新斬なる遊戯を為して散しぬ、門を出で、星を仰げば、演武場の時計丑満を告げぬ。火事あり、駐車場の前なりき。一同走せて行く。

一月三日

清水和三郎君此夜、長嶺林三郎氏宅にてカルタ会に遊び遂に無断外宿す、之れを前きに、一日の夜、百瀬俊太郎君同じく無断外宿舎す、頗る面白からずといふべし。

一月五日

昨夜無断外泊せしもの左の四名あり

島野重太郎 川田小三郎

森川孫蔵 八田盛忠

右につき石沢副舎長の厳訓あり

・木村 煥君(土木工科一年)本朝入舎せらる、

一月六日

木村莊輔君本日限り退舎ストノ事不意に起り同君ノ送別ト木村煥君ノ歓迎会を兼ね午後、送迎会ヲ開ク

・八田盛忠君漸く本晩帰舎す、

一月七日

・館本庄次君本日午後帰舎す、

一月九日

・昨夜木原七郎君、村上雄之助君門限に遅れ本朝一時に帰り来る、

一月十日

君本日午後帰郷す、

・午後六時半より文学部第一回演説会を開く、終り 時なりき、

一月十九日

・委員会あり、食料の料理改良、入浴期限、便所清潔につきて評議す、

一月二十日

・廊下を下駄を佩きて歩みたるもの、又門限 [ 入力者注：「廊」には「きへん」が付く ]

に遅る、もの等ありしに付て石沢副舎長の厳訓。

一月二十九日

・島野重太郎君及び館本庄治君退舎す、

一月三十日

・午後第七時半嶋野君の送別会を開く、館本君 来らず。

一月三十一日

・月次会を挙行す。

二月四日

・吉川有年太郎君（土木工科）今晚入舎せらる、食事明朝より。

二月十四日

・文学部にて第二回演説会を開く、

貳月廿二日

・木村君本日より欠食す、但し昨日迄夕食のみ食し居りしとの、

貳月二十六日

・本日分会計報告を為す、左の如し

ストーブを用ゆる人 六円八拾四銭一厘

火鉢を用ゆる人 七円二拾五銭四厘

貳月二十八日

午後六時より月次会を開く、ライスカレーの美味將に譬ふるにものなけんとなす、委員は、三、四両学の人々。高杉栄次郎氏来り、フマリップ、ブルックスに就きて語る、云はく、北海の宏麗なる天地に俯仰すもの大に養ふ処 [ 入力者注：「麗」は「晋」の下「日」の部分に代えて「鹿」の上最初の2画を省いた文字 ] なかるべからずと。

一先づ月次会を閉ぢて森川君の送別を為す。

三月三日

本日より木村煥君昼夕食し初む。

三月八日

木村煥君病気の為め退舎、午後送別会を為す

三月十一日

石沢副舎長公命を帯びて山陽、山陰に行かるゝに際し、午後五時スシを賜ひ菓子を賜ふ、テーブルを並べ舎生一同相對し嬉々として喫し且つ茶を飲む。不在中よく自治の下に相誠むべきこと注意ありたり。

三月十四日

午前八時五十分室蘭行列車ニテ石沢副舎長内地へ向けて出発す。

三月二十一日

・武田平三郎君、瀬戸太一君本日午後帰郷、  
・舎生五名の欠員あり、為めに農学校に募集広告を為す。

・宮部先生来舎、石沢氏不在中の事及び此度の募集につきて注意あり。

三月廿五日

・上谷良造君目出度中学を終へ、神戸商業学校に向ふ、為めに送別会を為す。

三月二十七日

・大内辰雄君退舎す、吾等君の為めに甚だよしとせず、

・清水和三郎、笠井幹夫の二人本日午前出発明晩帰るべく栗山に遊ぶ。

三月二十八日

・文部省より飛電、農学校に来る、いはく「

札幌農学校を改名して札幌実業専門学校となさん」と、舎生一同大に悲しみ、且つ憤す、試に思え、もとより学校の名目之れを改むるは不可なかるべけれど、昔より一種の特色を帯びて来れる札幌農学校を改むるは甚だ悲しむべきことなり、さなり実業専門学校と呼むで故クラーク博士を思ふべからず、クラーク先生の衣鉢を伝ふべきの名としては札幌農学校の外なけん。さりとても文部省はかゝる小さき事柄を發布して彼れの名声をあげんと

、  
三月三十日

・午後五時半夕食、赤飯、奈良漬にて大に喫す、全七時月次会開会、吉川君司会者たり、吉田君、笠井君の話あり、殊に吉川君の催眠術につきて語りしは妙味を覚ゆ深かりき。茶菓を喫し、催眠術実験を行ふ。

・委員を改撰す、結果左の如し

鈴木君 十二点 (会計)

百瀬君 十一点 (書記)

梶君 九点 (賄)

木原君 六点 (衛生)

・又、文学部の補欠委員一名を撰ぶ、笠井君五点にて当撰、百瀬、梶両君は重来の如く文学部の委員たり、

・又テニス部上谷君の跡に高松君六点にて当撰す。

・本日会計報告を為す、舎生大いに減じ十七名の外、帰省せるもの等ありて寂淋に堪へぬ今日、ストーヴを用ゆる人六円八十五錢五厘、然らざる人七円三十五錢五厘とす、

四月一日

八田重忠、鈴木勇一の兩名本日常山溪に行く明日帰舎之筈、田下政治君(札中第五年生)入舎ス、食事本日より

四月二日

八田、鈴木の両君帰舎せらる

四月五日

百瀬俊太郎門限に遅れて帰舎す、山田先生を訪へるなりと、

四月九日

笠井幹夫君本日都合の為め退舎せらる、同君は以前寄宿舍委員として又、現に文学部委員として当舎の為めつくされし事大なり、記して以て謝意を表す、

吉川、高松、吉田、百瀬の四氏学校之委員として用事の為め十時半に帰舎す、

四月十一日

午後七時ヨリ文学部第三回演説会ヲ開ク

吉川有年太郎君門限二遅ル

四月十四日

農学校予修科生徒一同教師に辞職を勧告し、停学を命ぜらる

四月十六日

本日午前十時過武田、瀬戸両君帰舎せらる、  
食事昼より、

四月十七日

本夜百瀬俊太郎門限におくる、但し父の証明  
書あり、高松君も門限におくる

四月十九日

本日午前百瀬俊太郎君帰省す、食事は朝まで

四月二十三日

本日より清水和三郎君食事とらる

四月二十五日

・午後五時半夕食、西洋料理にて大に満腹す、  
全七時月次会開会す、委員は七、九号なり、  
吉田君、羽生君、武田君、清水君の談話あり  
終りて各室より余興あり、已後茶菓を喫し、  
雑談数刻に渡る、

四月二十六日

午前一時半より北一条東一丁目に大火あり、  
焼失家屋拾五、六戸なり、舎生行く者多し、

四月二十八日

本日百瀬君室蘭より帰る、食事夕刻より、

四月二十九日

本日会計報告を為す、ストーブを用ゆる人七  
円四十銭、然らざる人七円五十四銭五厘なり  
し、

五月一日

今晚予修科一年級川村只吉君入舎せらる、食  
事明朝より

五月四日

蛎崎鉄太郎（札中一年生）今晚入舎せらる、  
食事明朝より

五月六日

仲尾仲太郎君（札中一年生）今晚入舎せらる  
食事明朝より

五月七日

百瀬君、武田君、鈴木勇一君、山口元幸君、  
半沢亮君、右五君門限に遅る

五月九日

午後七時より第四回演説会ヲ開ク

五月拾日

午後一時半よりテニス大会を博物館庭園ニ開  
ク、午後五時閉会す、甚だ盛会なりき、夕は  
ライスカレーの饗応ありたり、

清水和三郎君、百瀬俊太郎君門限に遅る

五月拾一日

清水和三郎君本日午前より常山溪に行く、弁  
当及び米を持参す

五月十六日

高松正信君本日午前より常山溪に行く、明日  
帰札の筈、

副舎長石沢達夫君本日午後二時着の汽車にて  
山陰山陽地方より帰札せらる、午後参時より  
歓迎会を開く、

五月十八日

本朝百々瀬俊太郎君退舎せらるに付午前六時  
半より送別会を開く、同君は、寄宿舍委員と

して又現に文学部委員としてつくす事大なり、  
記して謝意を表す、

五月拾八日

高松正信君、清水和三郎君本日午後常山溪より  
帰舎せらる、

五月二十一日

竹田平三郎君今晚退舎せらる、午後六時半より  
送別会を開く、氏は札中を卒業せられ笈を  
負ふて仙台に向はんとす

五月二十五日

本日午後和歌山県人上野亮太君入舎せらる、  
直ちに殖民地に向はる

五月二十六日

今晚、札中五年生中嶋九郎君入舎せらる、食  
事明朝より

五月二十七日

本日午前、上野亮太君帰舎せらる、食事昼よ  
り、

五月三十日

本朝会計報告をなす、一人に付七円五十六銭  
五厘なりき

午後七時半より例の通り月次会を開けり、

中嶋九郎君午後より何地へか旅行す、

蛸崎鉄太郎君午後より小樽に旅行す、

五月三十一日

中嶋九郎君本日午後寄舎せらる、

六月一日

本日午前蛸崎鉄太郎君小樽より帰舎す

六月二日

石沢副舎長公命を帯びて本日午前十時二番汽  
車にて北見、天塩、根室地方へ農事視察とし  
て行かる、に際し菓子を賜ふ、午後五時半よ  
り食堂に於て舎生一同喫し、且つ茶を飲む、  
留守中自治の下に相誠む可き注意ありたり、

六月六日

清水和三郎君本朝食事をなし以後は食事を止  
めらる

六月八日

清水和三郎君都合有之退舎せらる（本日午後）

六月九日

修学旅行の為め田下政治君、中嶋九郎君は留  
萌地方へ、山口元幸君は室蘭地方へ、八田盛  
忠君、瀬戸太一君は石狩地方へ、蛸崎鉄太郎  
君、中尾仲太郎君は銭函に旅行せり、然し、  
蛸崎君、仲尾君兩名は本日午後帰舎せり、

六月十日

八田盛忠君、瀬戸太一君兩名は本日午後六時  
石狩より帰舎せり、兩名とも夕食をなす、

六月十二日

山口元幸君本日午後七時千歳地方より帰舎せ  
り、但し食事は明朝より、

六月十三日

田下政治君、中嶋九郎君兩名とも本日午後六  
時留萌地方より帰省せり、兩名とも夕食せら  
る（六月十三日）

六月二十三日

川村只吉君都合有之本朝退舎せらる  
君本日正午仙台に向はる

六月二十七日

本月の月次会は本日挙行せらる、先づ夕飯に「ライスカレー」の馳走は例の如く頬をうたしめぬ、七時半より吉川藤左衛門君之輸出入に関する演説より始まるや、宮部先生は大嶋先生を伴れて来らる、依て吉川君の演説に次いで大嶋先生は米独の大学々生の生活に就て面白き話を為し、談吾人之处世之教訓に涉りて局を結ばる、茶菓（宮部先生より寄附されしビスケット）の饗応ありて十一時に散会す本日農学校之学業試験之成績発表せらる、農校之生徒本舎にあるもの凡て八名、而して落第者なし、

六月廿九日

家計報告発表セラル、本月分八一人二付七円三十二銭

七月一日

本日室蘭行二番汽車ニテ吉川有年太郎氏、羽生氏、俊氏帰省セラル

七月二日

高松正信君退舎シテ帰郷セラル、食事八朝丈

七月四日

上野亮太君本日午前幌向に出発せらる、氏八都合により此俟退舎なさるかも知れずと言われたり、

吉川藤左衛門室蘭行二番列車にて帰郷せらる但同氏八本日退舎せられたるなり、

七月九日

本日米山豊君入舎せらる、但食事は明朝より

七月十三日

本日正午川田君帰舎ス

七月十四日

吉田守一君今朝一番汽車にて余市に出発せらる、

本日分之読売落札人八半沢君にして十三銭二厘

北海タイムス八梶君にして十銭

十四日より三吉神社之祭礼あり、

七月十六日

吉田君帰舎ス、蛎崎君帰省ノ途ニ就ク

七月十七日

田下君、瀬戸君、仲尾君帰省ノ途ニ就ク

午後中嶋君帰省ス

七月十八日

八田盛忠君帰省セラル

ラケット二丁昨日東京ヨリ到着シタリ

本日七十六度

七月廿日

山口君帰省ス

七月廿一日

半沢君帰省ス

七月廿五日

村上君帰省ス

七月廿九日

吉田守一君帰省せらる

七月三十一日

石沢氏本日帰舎せられたり

八月二日

木原君本日帰郷す

八月十日

本日小川良五郎君入舎せられ明朝より食事さ  
る、

八月十一日

川田小三郎君退舎して帰国せらる、君は今回  
農校を退き更に熊本高等学校に入らる、

八月廿日

吉田守一君帰舎す

本日大黒座二於て日本力行会の慈善音楽会あ  
り、

此頃八日中と雖寒暖計七十二三度に過ぎ  
ず、併も今年になりて尤も暑き氣候なり

八月廿二日

石沢副舎長本日浦川地方へ出張せらる

八月廿六日

半沢君帰舎す、食事明朝より

八月廿八日

山口君帰舎す、食事は明朝より

八月廿九日

瀬戸君帰舎す

八月卅日

田下君、中尾君帰舎す

八月卅一日

米山君、小川君退舎す

中嶋君帰舎す、黄金井君数日間逗留せんこと  
願出でられたるにより入舎を許す

九月一日

八田君帰舎す

木原君、村上君、蛭崎君帰舎す、之にて中学  
の諸君は皆揃へり

八月分の会計報告せらる

八月中は在舎員甚だ少数なりし為め従って其  
負担すべき食費の如き之を通常の如くする能  
はず、依て舎長副舎長の意見に基き、帰省中  
の舎員よりは舎費を徴集し、下婢一名分、学  
僕一名分の食費として在舎生と同一の食費（  
舎費は含まず）丈を補助せしめたり、

九月三日

石沢副舎長帰舎す、吉川有年太郎君退舎する  
由を葉書を以て申来る、

九月五日

小金井君退舎せらる

九月七日

上野君帰舎す

九月九日

今朝朝倉信彦君入舎せらる、君紀州和歌山の  
人、今年農校予修科へ入学せらる筈を負ふて  
新に札幌に来れるものなり

羽生君歸舎す、食事は明朝より

九月十日

石沢副舎長令弟不快の報至り郷里盛岡に出発せらる

川村君歸舎す、

九月十一日

高松君歸札す、臨時寄宿舍より通学せらる

今夕畑一郎君入舎せらる、君は秋田の人今節農校土木工科へ入学せられ、始めて津軽海峡を越へて至れるものなり、

森岡君入舎せらる、予修科一年級の人

九月十二日

予修科新入生根岸元吉君（東京ノ人）及林基人君（和歌山）の両氏入舎せらる、前君は東京の産、後者は和歌山の産

九月十四日

予修科一年級生鈴木隈三君（名古屋ノ人）入舎せらる

九月十五日

盛岡なる石沢市より令弟永眠の悲報至る、不敢取哀電を發し弔之す、

九月二十二日

石沢副舎長歸舎す

九月二十三日

新旧の別なく凡て抽籤を以て室順を定む

九月二十六日

月次会を催す、石沢副舎長の新入舎生を迎ふるの辞ありて宮部舎長の在舎生の規約に就て自身の経験を語られ、吉田君の歓迎の辞了るや新人舎生根岸、畑、鈴木隈君の演説ありたり、馳走は餅菓子、林檎堆高き迄に積出されぬ、隠芸の余興は時の移るを忘れしめ十一時過ぐる頃強て解散せり、

同日委員撰挙ありて左記之人々当撰せり

会計 羽生君 書記 高橋君

賄係 吉田君 衛生 田下君

文学部 梶君、中島君、山口君

運動部 鈴木勇君、朝倉君

九月三十日

会計報告あり、本月分は一日平均一人拾八錢三厘にて、一ヶ月のもの六円五十一錢五厘なり

本月は会計の割増法を全く変更し、二十日以上二十五日以内食事を為せし者は、五分増とし、二十五日以上の者は割増を全く為さず、二十日以内の者は一割増と為し、舎費は従来通りとす、

明治卅六年十月一日

此日ヲ以テ前記ノ通り新委員八凡テ旧委員ヨリノ事務引渡シヲ結了ス

十月二日

本科一年生吉田宗一君、高松正信の二人地質修学旅行の為め一番列車にて幌内、幾春別炭



山に向け出発せらる

十月三日

今冬に於ける初霜降り、朝六時気温華氏三度十なり

此日昨日出発せし兩人修学旅行より帰舎せらる

十月四日

札幌中学校に運動会あり、我舎生中嶋君は英語競争に、羽生君来賓競争に、山口君は各級撰手競争に何れも を取らる

十月五日

午後八時より月見の宴を開く、御馳走は、団子の代りにIndian corn及び枝豆なり、十五夜の月秋天の懸れる様実に気も心も澄み渡りbrainも自らcoolとなる、九時散会す、之れよりは、又思ひゝ に月見第二次会を開きし、縦長の「く」]

[ 入力者注：「ゝ」は「思い」の繰り返し

今度は腹の一杯に困しむなど滑稽なりき

十月六日 十六夜月

午後十時より月蝕あり、欠ける事約八分五厘一時過ぎに終る

十月九日

此日天候甚だ嶮にして降雨屢なり、昨日は露国満州撤兵第三期限に当れども果して約束を踏むや否や、其れがあらぬか昨日より天候一変して黒雲度々西北に当りて起る、天為めに暗く風雲囀た急なり、今夕は雨に少く雪ミゾレ交ゆ、寒気も亦甚だしく定めて明朝は手稲山上に白雪を見るならん、此夕にあたりて、此度病を得て郷に帰らるゝ八田盛忠君の送別会を開かる、九時より十時半まで各々其別れの辞を述べられて別離の情に堪へず、最後、八田君の答辞あるに及んで皆能く仰ぎ見る者なし、実に君は中学に入校せられし以来当舎に来られて孜々勉学又他を觀るの違なき時に当りて吁君の母君は今夏逝けり、而して君未だ其悲歎の癒えざるに病魔は再び襲ひ来りて君をして又学事を見る事を得ざらしむ、丈夫病を得て己れの抱負を行ふ事を得ず徒らに故山に起居せんとする其心情を思へば同情の念に堪えず、君夫れ静養して他日の再会を期せん、会終りて暫時文学部の件に于し委員より相談ありたり、

十月十日

八田君本日午前八時を以て退舎せらる

生十五名手稲登山を成す二就て弁当其他準備に忙し

十月十一日

此日日曜にして午前三時に起床手稲登山を為す、四時出発、一行は十五名なり、即ち、石沢達夫君を始めとして木原六郎、山口元幸、梶正雄、鈴木勇一、盛岡光信、上野亮太、朝倉金彦、半沢亮、瀬戸太一、中尾仲太郎、村上雄之助、蛎崎鉄太郎、速見丈夫、高松正信にして手稲山麓に達して漸く東方白む、十時

に山頂に達しぬ、麓より是処までは四里なり、途中道嶮にして非常に苦辛せり、山頂に至れば白雪点々として残留し、今年之初雪を味ふ、天気は近来稀に見る処にして一点の雲なく、眺望絶佳彼方には札幌岳羊蹄山五嶮山等最早雪の冠を頂けるを見、此方には石狩の平原一眸の中に連り一躍すれば銭函の海中に飛入るべく三角山藻岩山の如きは遥かに足下にあり、此処に陸軍測量人夫一人居たり、即ち火を起し昼飯を食し石沢副舎長よりのビスケットを味ひつゝ、此雄大なる景に接しては心気自ら濶然たるものあり、帰途は軽川に下らんとせしも終に道を得ず、再び前の道を取る、時に午後一時即ち三時間を頂上に消せり、帰途は葡萄、ユリア、等を採集しつゝ、無事に帰舎する事を得たり、時に六時半直ちに湯に疲労を流して夕食を喫し心持よく一夜の夢を貪るを得たり、幸ひに熊も大勢に辟易せしか遂に其姿を現はさず怪我人もなく愉快に一日を消費する事を得しは近来の快事なりき、

十月十六日

鈴木勇一、蛎崎鉄太郎君小樽に遊びに行かる

十月十七日

根岸君（元幸）病阿の為に札幌病院に入院せらる、幌都に来て未だ六ヶ月を出ずして病の為の休学の止むを得ざるとは実に気の毒の至りなり、食事は朝のみ

此日羽生君、畑君、田下君は石狩に鮭猟を見に行かる

木原、瀬戸、盛岡、上野、村上、梶、高松の七名は定山溪温泉に行く

鈴木、蛎崎君は帰舎せらる（小樽より）

十月十八日

定山溪の一行一泊の上今日帰舎せ

らる、

寄宿舎の運動機関としてテニスの外に機械体 [ 入力者注：「関」には「きへん」が付く ]

操を奨励するの目的を以て今日金棒出来上れり、

十月廿日

午後一時四十分二番列車にて石沢副舎長公用を帯びて函館地方（二週間の予定を以て出張せらる、

十月廿一日

木原六郎君都合の為め今夜を以て退舎せらる、夕食後為めに送別会を開く

十月廿四日

テニス大会を開く、東西、紅白、五人抜き等多数勝負仕合あり、天気も能く盛会なりき午後五時ライスカレーに空腹を充し、六時より直ちに月次会に移る、此度は宮部舎長、石沢副舎長共に欠席せし為め内輪に催す、初め島中君司会されて盛岡君（血性男子に就て）、林君（習慣に就て）、朝倉君（海軍の必要に就て）、鈴木勇一君（「思」に就て）各

演説あり、後茶菓余興に入り、興味津々として湧が如し、十時に及びて中島君の送別会を開く、君は今度父君の看護の為め止むを得ず退舎せられしなり、同君より林檎、梨等多数寄附せられ、茲に再び余興に移り十一時過ぐる頃散会す、委員は、鈴木勇、梶、半沢、中島君なり、

又此会に於て少しく来る可き当舎設立記念会に于して相談し、委員を左の如くに定む

接待係 高松、朝倉、村上、仲尾、瀬戸  
蛸崎君

食事係 吉田、鈴木勇、村上、仲尾、瀬戸、蛸崎君

会場係 田下、盛岡、畑、鈴木隈君

余興係 梶、山口、林、半沢、上野君

庶務係 羽生、川村、速見君

各部、其始めの人を以て部長と定む

記念会は来月（十一月）二日の夜之れを開く事に定む、

十月廿五日

中島九郎君家事上の都合に依りて退舎せらる

十月廿八日

根岸元吉君病気の為め入院せられし処、全快迄は二、三ヶ月を要するを以て暫時退舎せらる、

十月三十一日

石沢副舎長過日來函館地方へ公用の為め出張せられし処、本日午後三時歸舎せらる、

此頃は天候定まらず降雪さへありし程なるに一昨日午前五時青函直航船東海丸は露船と衝突して函館の沖に於て沈没す、乗組員七十余名の中死者三十九名惨の極なりと云ふべし、本月分実費六円九十八銭

十一月一日

・本間重一郎君入舎せらる

十一月二日

今夕を以て我青年会寄宿舍満五年設立記念会を開く、来客は、黄金井、田中、竹田、藤井、小川、米山、池田、松井、逢阪の諸氏にして当日招待せしものにて不参の人々は、河村精八、川口、末光、吉川、鈴木力治、河内、有元、竹尾の諸氏なりき、会は五時半に晚餐を以て開かる、会場はテーブルを列し、正面には記念会なる額を挙げ左右の壁には絵画を以て飾り一同親しく豚飯に鶏の汁を腹一杯食し、終れば六時半より再び会を開かる、先づ羽生君司会として開会の辞を述べられ、次いで石沢君の此日を記念すべきや否やと云ふ演説、吉田君の歓迎の辞、林君の新入舎生総代の撰抜、高松君の舎務報告ありて、池田競君の来賓総代の選抜、宮部舎長の感話、小川良五郎君の演説、逢阪君の旧懐談の後、茶菓を呈す、此時一同起立して宮部舎長の満五年間の御尽力に対して敬意を表す、余興は滑稽演説、剣舞、ハ一モ二カ、落語、皿廻し、一口

嘶し、書生演劇、仁和加、等興味津々として抱腹絶倒幾回あるを知らず、余興委員の功勞を謝す、之れを終りて林檎を食し、今度は当舎特有の權助を演じ主客共に打ち混じて或は權と呼び、助と叫び之れ亦面白味湧くが如く全く歡を尽して閉会せしは十時四十分なりき、実に今日の如く盛大なりしは前に其此を見ず、茲に目出度一同親睦を図る事を得しと共に今后益々舎の健全なる発達こそ望ま欲しけれ、

十一月四日

・羽生君森林科の修学旅行にて一泊小樽方面に向はる、

十一月五日

・羽生君帰舎せらる

十一月九日

・予修科二年生沖繩県人多加良憲君入舎せらる、食事は明日より

十一月十四日

・山口元幸君家事上の都合により退舎せらる、午後八時より送別会を開く

鈴木隈三君足創の為め札幌病院に入院せらる

十一月廿八日

・会計決算を為す、此月は紀念会等ありし始め且つ舎生も少なかりし故に例月よりも多額を要したり、即ち実費七円十七錢、炭代四十四錢なりき

十二月二日

・舎生三名欠員あるを以て農学校に入舎生募集の広告を出す

十二月九日

・札中三年級丹羽八郎君入舎せらる、夕飯を食す

十二月十四日

・農学校、札中、私立中何れも試験始まる

十二月十九日

・各学校何れも試験終わる、夕飯に汁粉の御馳走ありたり、

・瀬戸君、蛸崎君、田下君此日帰省せらる

十二月廿日

・本間重一郎君帰省せらる

十二月廿四日

・土木工科一年生田村与吉君入舎せらる、但し食事は翌日より

・月次会を開く、晩食は豚飯、六時十分より開会、丹羽君、上野君、多加良君、吉田君、石沢君の演説あり、最後に宮部舎長の爪と口に于しての御注意ありて後委員改撰を行ふ  
新委員は 林君、朝倉、多加良君、川村君  
運動部は 盛岡君、高松君  
文学部は 梶君、吉田君、鈴木君

茶菓の時高松君のEsperanto語に于しての話しあり、宮部舎長、石沢副舎長より密柑の寄附ありたり、余興はトランプ、歌留多等にして十数番互に其優を競ひ十一時半興味津々な

る時割愛す

十二月二十九日

・歳暮として金壹円八十銭賄婦に、金五十銭

速見に贈る

十二月卅日

・田下君帰舎せらる

・寄宿舍内大掃除をなす

・上野君幌向に帰省す

十二月廿八日

・当月の会計決算をなす、実費六円六十銭、

炭代七拾三銭なり

十二月三十一日

・来学季の新委員を次の如く互撰す

賄委員 朝倉金彦君

会計 " 川村只吉君

衛生 " 林 基一君

書記 多嘉良憲君

・本日夕食に年取をなす、